

街道をゆく二

# 韓のくに紀行

司馬遼太郎



# 街道をゆく二

司馬遼太郎

朝日新聞社

一九七二年四月十五日 第一刷発行  
一九九六年五月二十日 第二十二刷発行

街道をゆく 二

著者 司馬遼太郎

発行者 川橋啓一

印刷所 凸版印刷

製本所 青柳製本

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地五-三-二  
電話 〇三-三五四五-〇一三一 (代表)  
編集・書籍編集部 販売・書籍販売部  
振替 〇〇一〇〇-七-一七三〇

定価はカバーに表示してあります

街道をゆく

二

本書には「週刊朝日」昭和四十六年七月十六日号・連載第二十九回から、四十七年二月四日号・第五十八回分までを収録

## 目次

|         |    |
|---------|----|
| 韓国へ     | 7  |
| 釜山の倭館   | 19 |
| 倭城と倭館   | 31 |
| 釜山にて    | 45 |
| 李舜臣     | 57 |
| 駕洛国の故地へ | 71 |

|        |     |
|--------|-----|
| 金海の入江  | 83  |
| 首露王陵   | 97  |
| 新羅国    | 111 |
| 慶州仏国寺  | 123 |
| 歌垣     | 135 |
| 七人の翁   | 147 |
| 慕夏堂へ   | 159 |
| 倭ということ | 171 |
| 沙也可の降伏 | 183 |
| 金忠善    | 195 |
| 友鹿の村   | 207 |
| 両班     | 219 |

|           |     |
|-----------|-----|
| 沙也可の實在    | 231 |
| 大邱のマッサージ師 | 243 |
| 賄賂について    | 255 |
| 洛東江のほとり   | 267 |
| 倭の順なること   | 279 |
| 李夕湖先生     | 293 |
| 百 濟 仏     | 305 |
| まぼろしの都    | 317 |
| 日本の登場     | 331 |
| 白村江の海戦    | 343 |
| 平 濟 塔     | 357 |
| 近江の鬼室集斯   | 369 |

題字 棟方志功

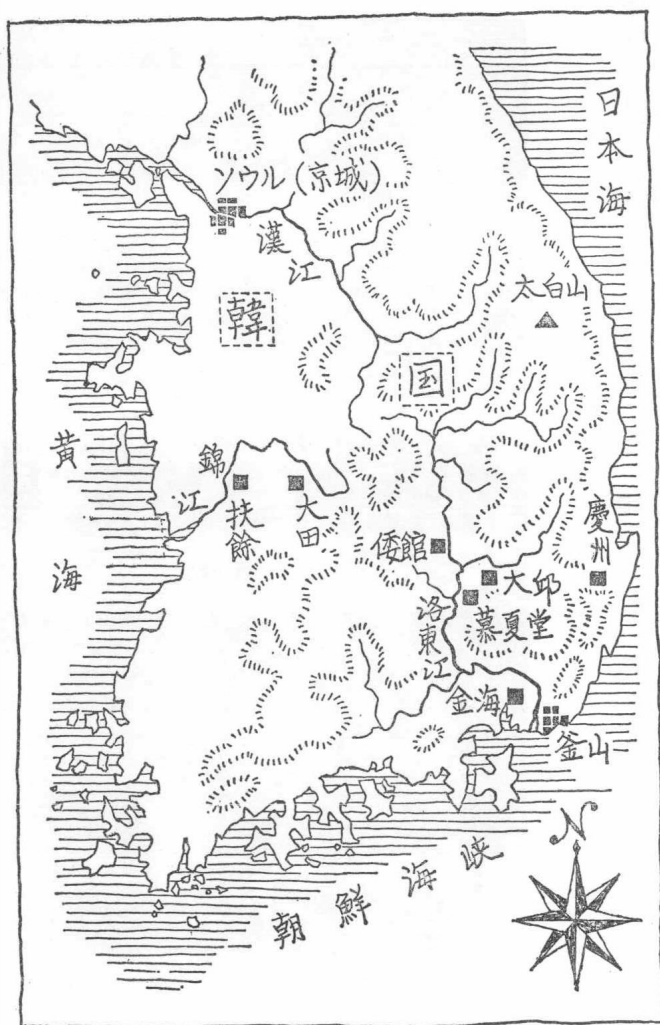
え 須田剋太

装幀 原 弘

地図 大川一夫

韓  
國





私が韓国にゆきたいと思ったのは、十代のおわりごろからである。

兵隊のとき、その地のレールの上を通過した。関東軍へ送られるとき、貨車の小さな窓からわずかに朝鮮ガラスが飛ぶ風景がひとこま、そして禿山の記憶がかすかに私の胸のなかにある。終戦の直前、私の連隊は戦車を七十輛貨車に積んで、朝鮮經由で本国へ帰った。貨車が、その当時京城とよばれていたソウルを通過するとき、私は貨車のトビラを細目にあけて、ひょっとすると今生の思い出になってしまいかもしれないこの李朝の旧王都を懸命に見ようとした。ところがあれだけ懸命に見たのに、停車場に面した民家のおあつい屋根瓦しかおぼえていないのである。しかもその屋根瓦の色は、私の記憶のなかでは別なつやめきを帯びていて、まいくらおもしろい出しても、青というよりも暗い深味をたたえた高麗青磁の膚質とかさなってしまう。まさか高麗青磁の屋根瓦などあるはずがないのだが、私の韓国に対するイメージのある部分は、そのように多少お伽めかしい。

チャさんという女性がいる。ミス・車。

今年のまだ寒いころ、韓国にゆくについての手続きを代行してもらうためにミス・チャに来てもらった。彼女は伽倻山という名山のある慶尚北道高靈の人で、ついでながら李恢成氏の「伽倻子のために」という小説の主人公の名はこの山からとったのだろうか。彼女は日本語を

学んでまだ数年にしかないというが、じつに正確なNHK語がつかえるし、それに職業だといえどそれではまいだけれども、書類に書きこんでゆくボールペンの使い方が、文字を書くという以上にチマチマと素早くて機能的な美しさを感じさせる。

「どういう目的で韓国にいらっしゃるんですか」

と、雑談になって、ミス・チャが、そう質問した。私は典型的な倭人だからちびである。が、彼女はバスケットの選手のように背が高くて、スーツがよく似合う。

「……さあ」

と、私がしばらく考えてみたのは、韓国への想いのたけ、というのが深すぎて、ひとこと言いくわかつたのである。私は、日本人の先祖の国にゆくのだ、ということをおもったが、それはどうも雑な感じもして、まあ古いころ、それも飛びきり古いむかしむかしにです、ね、たとえば日本とか朝鮮とかいった国名もないほど古いころに、朝鮮地域の人間も日本地域の人間もたがいにつだったところでは思っていたでしょうね、ことばも方言のちがいで程度のちがいはあるにしても、大声で喋りあうと通じたでしょう。そういう大昔の気分を、韓国の農村などに行つて、もし味わえればとおもつて行くんです、と私はたどたどしく話した。

流暢な日本語の使い手であるミス・チャはしばらくくくびをひねつて私のいうことを自分なりに理解しようとしているふうだったが、やがて顔をあげ、かげのある微笑をわずかにひら

て、

「つまりゴウヘイしようとおっしゃるんですか」

と、おどろくべきことをいった。ゴウヘイ。合併がっぺいである。かの悪名高き日韓合併をもう一度やりたいのか、という意味であった。冗談でいっているのではなく、本気である。

明治のころ、日本の東洋学の学者で朝鮮史に関心をもつ多くが、日韓同祖論という気分であり、喜田貞吉などはその代表的な存在であった。日本にコンパスの針を置くことさえやめれば、大きい場所では私はいまでもこれらの考えがまちがっているとは思わないが、しかしこの種の学説は朝鮮人を決してよろこばさなかった。

その機微は、朝鮮人の立場に立って考えてみればわかる。日本よりも古い時代から堂々たる文明と独立国を営んだ歴史をもつ朝鮮人にとって、漢文用語という東海の島夷（日本）が、にわかに偉そうぶって、

「お前たちとおれたちとは先祖は同じだよ」

どうだ、うれしいだろう、という態度でいったところで、たれがよろこぶか。たとえ学者の論文にはそういう押しつけがないとしても、この学説が、日韓合併後に朝鮮人懐柔のために多分に政治的に利用された形跡があり、朝鮮人からみれば多分におためごかしであり、民族運動の足をすくう学説であった。

ソウルの女子大を出たミス・チャが、日韓同祖論というものの歴史的ニュアンスについてどれだけの知識があるかはここでは問題ではない。すくなくとも、

「朝鮮人も日本人も一つだった」

という私の、私なりに無邪気な発言に対して、このあかるくて礼儀正しい彼女の反応が、決して無邪気ではなかったことが問題である。

さらにいえば、私は政治家ではなく、大阪の東郊に住む庶民である。その庶民が、そんなふうなことをいってもなお、

——ゴウヘイしようとおっしゃるんですか。

と、いう。それほどわれわれ倭奴ウエノムというのは、朝鮮人にとって押込強盗のようにおもわれているのである。

私は、どう答えていいかわからなかった。ここでいろいろの答え方が考えられるだろう。古代史的推論を彼女の前で演説するか、朝鮮語も日本語もおなじウラル・アルタイ語族に属し、ある計算でやるとこの二つの言語が岐わかれたのは六千年前である、実感的に言えばせいぜい四千年前ぐらいかもしれない、などというぐあいのことについても、それは彼女の猜疑心に満ちた美しい目の前には、サギ漢の弁舌ぐらいにしか受けとられないにちがいない。

私は、冗談をいって、彼女のセンスでわかってもらうしかなかった。ところが、とびきりへ



タな冗談をいってしまった。

「あんなウルサイ民族と二度とゴウヘイしたいという日本人はいないでしょう」

そういうと、意外にもミス・チャは怒らず、逆に晴れやかな笑顔になった。彼女のユーモアの感覚は、私のヘタな冗談を、高いレベルに作りかえてうけとってくれたのかもしれない。ウルサイ民族といわれることは、民族的自尊心を決して傷つけはせず、むしろコワモテしている感じで、私が朝鮮人であってもわるい気はしないかもしれない。伽倻山の露からうまれたようなきれいな肌をもつミス・チャは、本来愛されることを望む女性の心情として、コワモテを望むなどということはある私に対しては、彼女は民族的立場をわすれて対座することはできないようである。しかも彼

女は、サービスを売る旅行社の人である。私は客である。しかし彼女にとって客である前に、私は日本人なのである。いずれにせよ、朝鮮人と日本人という、この不幸な関係の外国人同士は、こうも対話がむずかしい。

第一、この稿で、英語で単に Korean というよび方、それ以外によび方のないこの民族のことをこの日本語の文章の中でどうよぶべきか。世界中で日本人だけが、韓国人とよべといわれたり、朝鮮人とよべといわれたりして、とまどっているが、私は平素、自分の友人の朝鮮人と話すとき、朝鮮人とよんでいる。「朝鮮」という言葉は、あの呪わしき以外なものもない政治という世界の上でこそ、朝鮮民主主義人民共和国が独占したかっこうになっており、大韓民国は通常このことばをつかわない。地理的呼称である朝鮮海峡はいま大韓民国の地図では「大韓海峡」になっている。しかし地図に印刷されている英語のほうはむかしながらに KOREA STRAIT である。英語国民は手軽でいい。

が、われわれ日本人としては、この名称ひとつでも重くくるしい。

まあ、この稿では民族の名称として朝鮮人というぐあいになります。むしろ韓国人、韓人、韓民族などと書いたりもするが、それらは便宜上同義語であるとし、いずれも政治的な塩っ氣を抜いた言葉のつもりであることをこわっておきたい。しかしながらときに政治的課題にふれねばならないときには、ちゃんと両国の国名を書くことにしたい。